

小網代の森と干潟を守る会
小網代 森と干潟つうしん



モリちゃんとガタくん干潟デビュー

森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ
小網代の森と干潟を守る会
〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5
代表 高橋 伸和 E-mail: info@koajiro-higata.com
URL: http://www.koajiro-higata.com
年会費：一般会員 ¥1000 賛助会員 ¥5000 (入会金不要 7月～6月)
郵便振替：00260-4-21569 コアジロノモリヒガタマモルカイ

第 109 回自然観察&クリーン

“ざわざわ ^~^^ 生き物にぎわう 小網代干潟を歩く！”



何となくうっとりしい梅雨時の上空をキョ~キョ~と心地よく ホトトギスが飛んでいく。この時期にしては比較的凌ぎやすい一日でした。

「小網代の森と干潟を守る会」のH24年第2回目の定例観察会が6月23日に『干潟のカニ』をテーマに実施されました。講師は小倉雅實さん。

この日の参加者は、会員、数組の親子づれ、偶然この森に東京から来たという若者も加わり、11名のスタッフと合わせ、合計31名であった。

まずは、アカテガニ広場で高橋伸会長のあいさつの後、全員で河口の橋まで歩き、干潟を見ながら全体の説明を聞いた。

そのあと干潟に降りて滞筋(みおすじ)に沿って小倉講師のアドバイスを受けながら各自自由に観察した。カニはもちろん干潟にいるあらゆる生き物を採取しそれぞれがバケツにいれ、アカテガニ広場に戻って一旦ここで昼食、午後からは講師の詳しい説明と干潟のゴミ拾いを行った。

一見干潟は、生き物がどこにいるのか分かりにくい。幸い、ここ数年、小網代干潟の調査が少しずつ進んでいて手引きもいくつか出されている。この手引きを手掛かりにあらかじめ予習。これまでの経験から、干潟で生き物の気配を感じる秘訣は、《まずは自分の気配を隠す!!!》ことと思った。

ところで、当日は“どんな生物に出会ったの？” なんと**52種類**だった。

○コウイカの卵 ぶどうの房状になった得体のしれない生物！水晶の玉のようにきれいな中に幼生が見られた。顕微鏡で確認イカとわかる。この他の卵状のものはツメタガイ、アメフラシ、タマシキゴカイの**4種**

○ウミニナの仲間 ウミニナ、ホソウミニナとかわいいツボミガイ。微妙に大きさ、模様、口元の形が違



う。貝類は全部で**8種**

○ハゼの仲間 ヒメハゼとビリンゴがかわいい。この日の魚類は**3種**

○エビの仲間 フトスジテッポウエビ、コブヨコバサミ、ヒゲナガホンヤドカリは常連だ。
エビとヤドカリは全部で**5種**

○カニの仲間 生きていたタイワンガザミは珍しい。この他のカニはモクズガニ、イソガニ、ケフサイソガニ、フタバカクガニ、マメコブシガニ、ヒライソガニ、タカノケフサイソガニ、チゴガニ、コメツキガニ、アカテガニ、アシハラガニ、ヤマトオサガニ、イシガニの全部で**14種**

○野鳥 カワセミ、メジロ、ツバメ、コチドリ（道中の畑）などの**7種**

○昆虫 アゲハ、ベニシジミ、ヤブキリ、アオスジアゲハなどの**8種**

○その他 アカエイ、モミジガイ、アカヒトデの**3種**

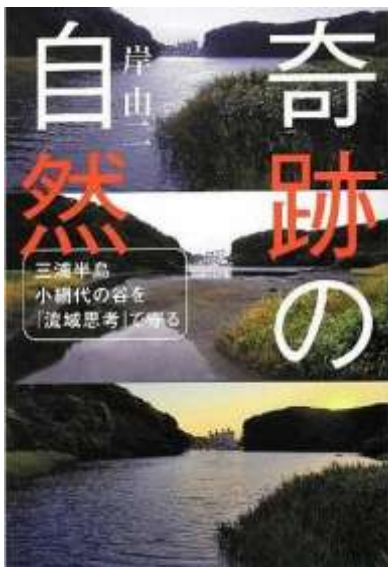


文・鈴木清市 写真・松下景太

※ 観察会は NPO 法人小網代野外活動調整会議と共催で実施し、アカテガニ広場や倉庫を使わせていただきました。

新刊書のご紹介

奇跡の自然—三浦半島小網代の谷を「流域思考」で守る



岸 由二著：柳瀬博一写真

八坂書房

定価 1600 円＋税

小網代保全の新しい時代をささえるための
著者渾身の一冊が出版されました
応援よろしくお願いたします

ご購入は

・amazon

www.amazon.co.jp 検索「本—奇跡の自然」

・小網代の森と干潟を守る会

Tel. 046-889-0067 (副代表 仲澤)

mail: info@koajiro-higata.com

・カニパトロール期間は干潟でも販売します

◆ 参加者のメッセージ

ザリガニがなつかしかったです。
チゴガニのダンスが印象的でした。

ひろこさん

よぶカニ（チゴガニ）をつかまえられてよかった。

かしお だいすけさん

自然について考えるきっかけになりました。とても面白かったです。また参加します

らいすさん

干潟体験をして様々なカニが見れて良かった。今後、沢山のカニを見て名前を少しずつ覚えて行きたいと思った。ありがとうございました。

細川 かおりさん

三浦半島で暮らしながら、このような豊かな自然が残っている場所があるのを知りませんでした。一時間で集まったカニの種類の数におどろきました。

佐藤 ヒデノリさん

今日はありがとうございました。めずらしいカニ、大きい いそぎんちやく、イカの卵… はじめてみるものばかりで大変興奮いたしました。そして、この里山を守っているからこそ生き物達がたくさん生きていることも知り、今後の生活の中で、何かしらできることをしていきたいです。

渡邊 澄枝さん

歩いてみて、豊かな自然林だなと感じました。20年程前、四国の海ぞいの道歩いた時、「魚付き林」という標示があり、当時は、それがどんなことなのかわかりませんでした。私を含め、みなさんの理解が進んできたと思います。

野口佐代子さん

子ども共々とても貴重な体験をさせていただきました。

この自然がいつまでも守られるとよいと感じました。また機会があったらぜひ体験したいです。

根岸 直子さん

自主的な観察中に声をかけて、参加させて頂きありがとうございました。昔に来た小網代に比べかなり変化しており驚きました。また、定期的にきてみたいです。よろしくお願いします。

本田さん

みんな 楽しかったです

渡邊 瑛久さん

とてもべんきょうになってとてもうれしかったです。またらいねんもさんかしたいです。

菅 ハルキさん

菅野氏にお誘い頂き横須賀の田舎育ちの割に知らない生物がいて勉強になりました。

ありがとうございました。

根岸 健一

いつまでもこの環境が続く事を祈ります。
小網代の森と干潟を守る会の皆様のご尽力、ありがとうございます。

菅さん

たくさん生きものが見れて勉強になりました。ずっとこの自然が残るといいなと思いました。

いたやんさん

楽しい観察会に参加できました。アカテガニの放仔を是非見てみたいと思います。ありがとうございました。

杉田さん

飛び入りでしたのに、観察会に参加させていただいてありがとうございました。色々な生き物がいる大切な場所ということが学べて良かったです。

田中 麻美さん

身近な場所に、大自然が残っているのに、驚きました。大切にしたいですね。

加塩さん

はじめて出会った海の生きもの、名もはじめて…、知らないものばかりですが、これからも楽しめると思うと、何回も参加したいです。

須田 漢一さん

カニがたくさんみれたことが楽しかったようです。

ねぎし すなおさん

いかのたまごがすごかった。いろいろな生物がいるのがわかっておもしろかったです。



ミキさん

* メッセージを寄せて下さった皆さま、ありがとうございました。

アマガニとは

仲澤さんからアマガニのことが新聞に載っていたので同封しましたと、「海のカリスマ(借り住ま)」いかがーヤドカリ料理の試食会— という2012年3月24日の神奈川新聞の記事を送っていただきました。ここには新たな名物料理として期待を寄せるヤドカリの一種「アマガニ」を使った料理の試食会の話が書かれています。アマガニと聞くとどんなカニだろうかと思われる方も多いのではないのでしょうか。三浦半島と房総半島の一部の漁師さんたちは昔から網にかかった大きなヤドカリをアマガニとかアマゾと呼んでよく焼いて食べていたそうです。三浦半島周辺では刺し網漁がさかんで、刺し網には大型のヤドカリも多く掛かります。刺し網を入れる海の深さによって掛かるヤドカリの種類も変わってきます。一番大きいのはヨコスジヤドカリ(ケスジヤドカリともいいハサミと歩脚に横スジがあるのでこの名前と呼ばれます)で棲息深度は30-200メートルです。オニヤドカリ(3種の中では一番小さなヤドカリでハサミは左右同じ大きさ、ハサミや歩脚に長い毛が生えています)は5-10メートルくらいに仕掛けたエビ網に掛かるそうです。イシダタミヤドカリ(ヨコスジヤドカリよりも小さなヤドカリで左の歩脚が石畳のようにゴツゴツしている)のでこの名前と呼ばれます)もエビ網に掛かり、棲息深度は5-50メートルです。これらのヤドカリは焼いて食べるほかに釣りの餌としてもよく使われているようです。三浦の漁港の網干し場で大きなサザエやヤツシロガイ、少し小さなアカニシ、カコボラが落ちていたらこれらのヤドカリが入っているかもしれません。小網代の漁港でもイシダタミヤドカリの入ったサザエ、アカニシが見られるかも。

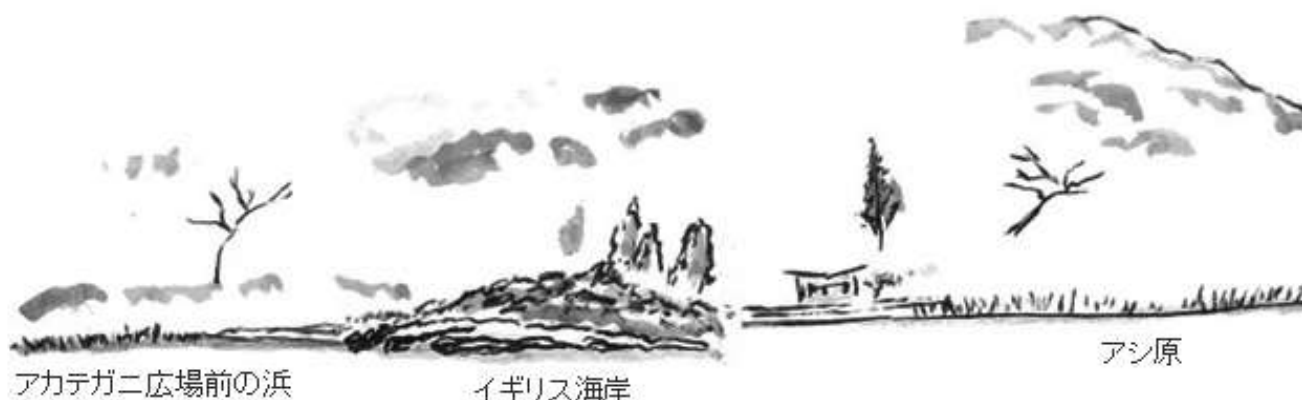
アマガニのみそ汁やどんぶりも食べてみたいですね。アマガニが三浦の新名物になることを期待します。ところでヤドカリを食べる食習慣は大きなヤドカリだけではなかったようで、干潟に棲む小さなヤドカリも食べていたようです。貝原益軒の「大和本草」(1709年)にはカウナ(カミナ、寄居虫)の塩辛として海辺に暮らす人たちに食べられていたことが書かれています。このように江戸時代の末期ころまではヤドカリの塩辛(カウナの塩辛)の食習慣が日本各地で見られたようです。「大和本草」に書かれている方法でヤドカリの塩辛を作ってみると結構おいしく、酒の肴には良いのではとのこと。

カウナの塩辛のカウナとは江戸時代まで使われていたヤドカリの名称です。「大和本草」では寄居虫と書いてカウナまたはカミナと読み、俗にヤドカリというと書かれています。

ヤドカリは日本では古来よりさまざまな名称で呼ばれていました。



アマガニの味噌汁



アカテガニ広場前の浜

イギリス海岸

アシ原

古名称を語感から分けてみると、

ゴウナ系統(ガウナ、ガウナヒ、カフナ、カミナ、など)

ヤドカリ系統(カニノヤドカリ、カニノヤトリ、サザイノヤトリ、サザイノヤドカリ、ヤトリカイ、ヤドカリ、など)

アマン系統(アマン、アーマン、など)

カニホラ系統(カニホラ、カニモリ、カニムクリなど)になります。

ゴウナの語源は蟹蝨(カニニナ)であり、巻貝の殻に入ったカニの意味です。

古文献(本草和名(918年)、延喜式(927年)など)からは少なくとも平安時代まではカミナという呼称が一般的でした。ゴウナ系統の名称はカミナ、ガウナ、ゴウナと転化してきたようです。江戸末期まで「居虫」と書いてガウナ、カウナと訓むのが主流でした。近世まではゴウナ系統が主流の名称でした。

ヤドカリ系統は呼称分布の広さも出現頻度もゴウナ系統について多いようです。ヤドカリの語源は「宿借」と思われます。ヤドカリという呼称は「日本積名(貝原益軒、1699年)」に始めて現れていますが、本草書にも物産帳にも見られますので広く一般的に使用されていたもので、その成立はゴウナより古いと思われます。博物館虫譜(文政年間1818~1830)によると小型の巻貝に入っているものがカミナで、サザエなど大型の巻貝に入っているものは寄居していると見えるのでヤドカリということがあります。

アマン系統は琉球での呼称で、現在も奄美大島から沖縄にかけてアマミ、アマン、アーマンなどと呼ばれています。

カニホラ系統はいずれもカニを含む呼称です。カニホラはカニと貝の組合せ、カニモリは「蟹守」であり、カニムクリのムクリは潜るの意味ということです。

また、ヤドカリと巻貝の間の名称の移行はしばしば見られます。イシダタミ、キサゴ、コシダカガンガラ、ウミニナ、カワニナなどをゴウナ、ゴウナイ、ゴナ、などと呼ぶことは全国的に見られます。

小網代の干潟でもホソウミニナ、ウミニナの貝殻に寄居している小さなヤドカリ(ユビナガホンヤドカリなど)が7月、8月ころには干潟の少し大きな石の周りなどに数千匹が集まっているのが見られます。三浦の海辺に暮らす人たちも江戸時代まではヤドカリの塩辛を食べていたのでしょうか。

参考資料:相模貝類同好会会報 No.16, 1984 大和本草、貝原益軒、1709

海の味 -異色の食習慣探訪-、山下欣二著 海洋と生物95、(vol.16 no.6) 1994

小倉 雅實



干潟のゆりかごの小さな住人 その5

小網代の青鷺は、哲鳥か聖鳥か、はたまたお笑い芸鳥か



ジポーリン菜穂子

大潮の夜、アカテガニのお母さんたちは、日没とともに、森から干潟をめざします。赤ちゃんたちを海に向かって、解き放つためです。放仔と呼ばれます。いのちの神秘に出会えるふしぎなすてきな瞬間です。

油を流したかのように静穏な油壺は小網代湾。コウイカや、タコクラゲにアンドクラゲ。悠々と気持ち良さそうに漂っています。（アンドクラゲには要注意ですよ、毒針で刺されてしまいますから。）たまにはハコフグも見かけます。生まれてくるゾエアを待っているのでしょうか。ときおり、ボラが水面を跳ねます。そして、そのボラをねらっているのでしょうか。藤ヶ崎に向かう森の木々にはアオサギが集まっています。

デブラ・フレイジャーの絵本『あなたが生まれた日』は、私たちが生まれてくるとき、動物や魚や花や木、そしてお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんたち、地球上のすべてが、私たちの名前を呼んで、そして、宇宙全体の力が加わって、地球にやってくるんだって教えてくれています。大潮の夜というのは、宇宙全体がいのちを呼ぶ力なのでしょうね。



古代エジプトでは、いのちが再び巡ってくるようにと、さまざまな工夫をこらしていましたね。ピラミッドを始めとして。いのちにまつわるエジプト神話は太陽神ラーを中心として、さまざまなお話しがあるそうです。その中にベヌウ（あるいはベンヌ、またはベヌ）という聖鳥がいます。これが、どう見てもアオサギ（*Ardea cinerea*）。このアオサギのベヌウから生まれた卵から太陽が生まれた、とか。火が生まれた、とか。太陽神ラーは、ベヌウとやってくる、などというお話しがあるようです。

エジプトのルクソールには王家の谷と王妃の谷があります。岩窟に建てられた壮大なお墓群です。その中には、一般公開をしていないものもあります。事前予約をするのですが、それでも、状況によっては見せてもらえない場合もあるそうですよ。しかも、見せてもらっても、中で過ごす時間は、わずか10分。それでも、壁画の保存状態がよく、それはすばらしいそうです。エジプトのファラオ（王様）の代表格のラムセス2世。この王様の大切なお妃さまだったネフェルタリ王妃のお墓です。その壁画に描かれているのが、ベヌウ。どこから見ても、アオサギです。エジプトの美女といえば、クレオパトラですが、クレオパトラは外国人だったので、このエジプト生まれのネフェルタリ王妃こそが、正真正銘のエジプト美人だそうです。ラムセス2世からはとても可愛がられたそうな。ルクソールの至宝と呼ばれるお墓のすばらしさからも大切にされていたことがわかるそうです。しかし、若くして亡くなってしまい、その後（かどうか!?!）、ラムセス2世は、何十人もの妃をもったそうな。何十人の美女を手中におさめても、初恋(!?)の人を失った隙を埋めることができなかつた、ということにしておきましょうか。百人を超える子供もいたそうですよ。



このアオサギ・ベヌウ。火の鳥ベヌウ。ギリシヤにわたり、フェニックスとなります。ギリシヤの歴史家ヘロドトスも、フェニックスのエジプト起源について触れています。そして、もうアオサギのイメージはすっかりなくなってしまいます。このフェニックスが東アジアにわたると、鳳凰。しかし、フェニックスは、1羽なのに対し、鳳凰は、鳳がオス、凰がメスのひとつがいです。一万円札には1羽だけですが。そしてもちろん、アオサギではありませんよね。

日本では、清少納言が『枕草子』に鷺のことを書いています。

鷺は、いと見目も見苦し、眼居（まなごい）なども、うたて
よろづになつかしからねど、ゆるぎの森に独りは寝じと争ふ
らむ。いとをかし。 (第四十一段 鳥は)

見た目はあんまりよいというわけではないのに、それでも、森の寝床では、必ずお相手を見つけようとがんばる！いいんじゃない！というわけです。エジプトでは聖なる鳥でしたが、清少納言には、恋のお手本かなにかのようにおかしく描かれています。この鷺は、はたして、アオサギでしょうかねえ。ほかのサギでしょうか。ゆるぎの森というのは、滋賀県高島郡安曇川（あどがわ）町付近にあった森だそうです。サギの名所で、歌枕にもなっています。これには、実は、もと歌があります。『古今和歌六帖』の巻六に、

高島やゆるぎ（万木）の森の鷺すらも独りは寝じと争ふものを

とあります。平安時代の私撰和歌集ですが、編者はわかりません。テーマごとに和歌が分けられています。そのテーマが、山、田、野、水、草、虫、木といった具合です。もちろん、恋もあります。日本文学を味わうには、絶対、自然科学的視点というか、知識というか。少なくとも、自然へのやさしいまなざしが、あった方がよいですね。

江戸になって、松尾芭蕉になると、アオサギは、哲人かのように描かれています。『猿蓑』には、俳門の人たちとの連句がおさめられています。そこにアオサギが登場します。鴨川、行商人、雨に降られて雨宿り、雨宿りの間にも世界は変わっていくねえ、無常だねえ、と続いてきた句のあと、

昼ねぶる青鷺の身のとうとさよ

という句を付けています。座禅をしている禅僧かなにかのようですね。で、ここまで、芭蕉が気高くもってきたところを、芭蕉の弟子、凡兆は、

しよろしよろ水に藺のそよぐらん

と一気に形而上から形而下に、つまり現実の自然の風景にもどします。アオサギのいる水辺には、イグサが生えてるよ～、というのです。絶妙ですねえ。

与謝蕪村には、愉快的な句があります。

夕風や水青鷺の脛を打つ

なんとなく、動物行動学のような視点がおかしさを誘いますね。

開高健が、釣りの師と仰いでいた井伏鱒二も、故郷の風景の中の愉快的アオサギを描いています。

ゴイサギよりも アオサギの方が頓狂である。こちらが釣りながら川をのぼって行くと、それを案内するように川かみの淵のところまで飛んで行って岩のてっぺんにとまっている。こちらがその淵に近づくと、アオサギは静かに飛び立って、また次の淵のところの岩の上にとまって待っている。送り狼ではなく案内に立つアオサギである。こんな日は、たいてい釣果良好と判じて間違いない。

まるで溪流釣のガイド役のようですね。さて、小網代のアオサギたちは、どんな姿を見せてくれるのでしょうか。鳴き声ですが、アメリカでは、「フラ〜〜ンク」とフランク君を呼んでいるかのように聞こえるのだそう。

参考にした本：

デブラ・フレイジャー『あなたがうまれたひ』（福音館書店 1999.）

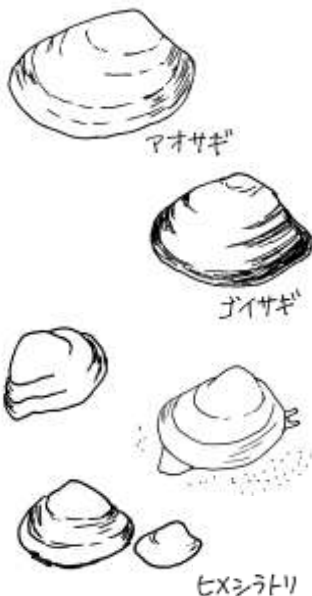
Erik Hornung, *The Ancient Egyptian Books of the Afterlife*, (The Cornell University Press, 1999).

Neville Agnew, "Preserving Nefertari's Legacy," (*Scientific American*, Oct. 1999).

『ヘロドトス 歴史』（岩波文庫 2006）

井伏鱒二「釣魚余談」『川釣り』（岩波文庫 1990）

小倉さんからひとことまめちしき ^ 0 ^



貝の名前にもアオサギというのがあります。少し青紫がかった白色の二枚貝です。貝の和名には鳥と同じ名前がつけられているものが多くあり、スズメガイ、カメメガイ、イソチドリ、ミヤコドリ、ホトトギスとあり、アオサギの間にはゴイサギ、サギガイ、ヒメシラトリ、など私が知っているだけでもたくさんあります。サギガイは真っ白でとてもきれいな貝で、逗子、鎌倉の海岸でも見られます。ヒメシラトリは小網代の干潟にも暮らしていますが、近頃は少なくなっています。

先日7月上旬に潮の引いた干潟にアオサギが40羽くらい降り立ってのんびり餌を食べているのに出会いました。干潟に出かけるとだいたいアオサギに出会います、そしていつも食事のじゃまをしています。

随想 小網代てんてん ③

チゴガニ きらきら

須田漢一

NPO法人小網代野外活動調整会議主催の「小網代干潟自然観察会」に参加する。

現地に着き、スタッフの方々を紹介されたあと、簡単な注意事項をお聞きし、河口の石橋の脇から干潟に下りる。

この干潟は、小網代の森の中央を流れる、浦の川が運んできた餌の豊富なドロ干潟で、たくさんの生きものが集まっている。2011年3月11日、東日本大震災時の津波によって、上部のドロが20センチほど持っていかれ、生きもの（特にカニ類）は少し減ったけれども直に回復する、と案内してくれる岸由二先生から説明された。

歩き出すとすぐに、周りがきらきらざわざわする。砂地のあちこちに、小さなカニが動いていた。

チゴガニである。

成長しても甲の幅が10ミリ程度というのだから、その小ささが分かる。穴を出たばかりのチゴガニは白いハサミに、干潟の碧い宝石といわれるライトブルーの顔で、こちらを見

ている。敵かどうかを確かめているのかも知れない。上から眺めると地味なのだが、向き合って見ると、何とも美しい。何かに驚いたような飛びだした長い目（眼柄）が印象的である。

チゴガニたちは、左右のハサミ（前足）を開き、空に突き上げ、すばやく閉じ、又それを繰り返している。お互いにコミュニケーションを図っているようでもあり、体をあたためているようでもある。1分間に30回くらい繰り返す動きを見ていると、目がくらくらしてくる。

ウェイピングと呼ばれるこの動作は、縄張り宣言やメスを呼びだすためと言われるが、本当のことは分からないようだ。オスよりも小ぶりのメスは、気に入ったものでなければ寄っていかないらしい（ヒトや他の動物に共通する）。ダンスのうまい下手には関係ないが、ダンスをしないものには目もくれない、という。小さな体で、いつまでもダンスを続けているその健気さ、真剣な様は、面白い、というよりも、生きものが持つ、ある哀しみを感じる。

チゴ（稚児）といえば、チゴユリを思い出す。早春、明るい雑木林の下などに生え、高

さ15センチほどの茎に花の幅1・5センチくらいの白色の花を1個（まれに2〜3個）咲かせる。球根は無く、つる状の根を環境の良い場所へと移動させて生きていく、しづとさがある。

それと、チゴザサ。湿地や水辺で、細い枝先に長さ2ミリほどの穂を疎らに付けるイネ科の目立たない草なのだが、群生することで自らの存在感を示している。

チゴガニがなぜ疲れを見せずに動けるのか分からないが、ウェイピングするその姿は、きらきら輝やいている。それは透明感のある白いハサミのせいだけではなさそう。きっと、こころの中の何かが進り出て、きらきら輝くのには違いない。

総じて、小さなものは愛らしさだけではなく、未来に向かつていく生命感がある。

干潟のチゴガニに、力を貰った観察会だった。

（2011、7、3、小網代湾奥の干潟で）

シーボニア クラブハウスにて

中井 由実

デッキの足下は たつぷりと水
これは海
濃い色のビー球のよう 暗いのに透明

小網代の海を

私は

裏の川の河口から続く干潟、
その延長としか考えてこなかった
大きく深く
遠くにあるものと思っていた

小網代湾に暮らすカニ達は
日がな この海を見ているのか
いのち続きの有機体として

広がる海原の端 干潟に立つ時
手の届く砂地を走る
生きもの達のつぶやきだけでなく
いのちの星くずを含む海にも
心向けていこう



七年

中井 由実

あの頃
干潟の眺めに共に歓声をあげた友が 今いないことを
私はもう 何かのせいにしようとは思わない
イギリス海岸を指して
一緒に歩いたことを想えば
悲しみは押し寄せてくるけれど

長い時間がたった

小網代の歴史に比べれば短いものだが

昔 小網代は

もの珍しげにやってくる私たちを

好奇心いっぱい迎えてくれた

変わるものと変わらないもの

残るものといってしまうもの

その移りかわりを

どこまで見つけていけるだろう

今日は

雨上がりの陽がさすから

初めてこの干潟に来たときのように

一人 たんぼぼ街道をたどっていこう

カニグッズ (2)



No. 3 銀のペンダントトップ

これは2006年4月1日の小網代つうしん93号にカニグッズとして、イラストで紹介されたかのにペンダントトップと同じくカニのバッチを組み合わせで作ったもの。私のお出かけの時の胸を飾る一番のお気に入りです。

会員のTさんが息子さんのHさんに頼んで作ってもらったものです。息子さんが小学1年生の時、アカテガニの放仔を夢中で見た経験があったそうです。その息子さんが成人後、銀細工の専門学校へ通い、こんな作品をつくれるようになったのだという。

カニパトの時を中心に皆さんの胸や帽子を飾ってくれればと思い、Tさんを通じて、作って貰いました。Tさんのアドバイスを受けて、袋にいれ、工房Hと名づけて、小さな収納箱に詰めて、4月29日の観察会に始めて売り出しました。スタッフのある方の胸元を今も飾っています。

カニグッズで、オリジナルな作品で少しでも会の収益になればと考えて下さったTさん。可愛いカニのペンダントトップ・バッチなどを作って下さったHさん。彼は今や2人の子どもの父親だそうです。これをつける度に親の子への深い愛情と子どもがそれに応える心根を思います。

6月5日、新宿の東京国際ミネラルフェアを訪ねた時、勿論、この胸飾りをつけて行きました。宝石や綺麗な石を売る売店の方に「素敵なおペンダントね。」と声をかけられましたよ。今をときめく大作家のHさんの作品を持っているとウン十年後を楽しみにしている私です。

カニグッズ収集家 宮本 美織

追記(銀細工に興味のある方、Hさんの紹介をします。「ELGA」のオリジナル銀の作品をどうぞ。)



スタッフコラム

◆石橋下のエイ

干潟の生き物を観察するため、石橋脇の茂みから濘筋へ下る。近くには参加者が7～8人はいたと思う。この日、6月23日(土)の「干潟のいきものたち」自然観察会へ参加した時のことである。

最初は子供用の座布団が沈んでいるのかと思った。ひらひらとヒレを動かすと腹部の白が目立つ。四角形で一遍が40センチ級のエイである。後に、Nさんが以前Kさんと20センチ級を確認していると話してくれた。もしかしたらその時のエイが大きく育っていったものかなと思った。

網を持っていた一人が、掬い上げ捕えようと身構える。その時、誰かがエイは尻尾に毒を持っているので止めた方がいいと大声で注意した。以前、岩礁の潮溜まりで凶暴な顔付きのウツボを網で捕えたことがある。大潮の潮溜りでは、逃げ遅れた危険な魚たちが取り残されることもあり細心の注意が必要である。

▶ エイ

体は平で薄く鰓孔が腹面にある軟骨類の総称で、日本近海の浅海性のエイは15種類もある。やや太めの鞭状になった尾部の先端に、鋭く尖った毒針を備えその針には返しがあり抜け憎くなっている。料理本には煮付け、ぬた、干物にすると美味とあった。



祖父川 精治

◆第35回みさき白秋まつり 白秋没70年 城ヶ島の雨誕生100年 特別観光記念イベント

日時：平成24年7月29日(日) 10時から15時まで

場所：城ヶ島白秋碑前

特別観光記念イベントの一つとして、城ヶ島灯台内部の一般開放をします。

平常は無人で施錠中です。

夜間になると自動運転し、点灯間隔は30秒毎です。

他に県水産調査船や海上保安庁巡視船の見学会や体験乗船も予定。

※ 北原白秋(1885-1942)大正期の詩人、歌人

ラムサール条約に 9 湿地が新規登録されました(新聞記事)

(2012.7.4 神奈川新聞)

ラムサール条約

9 湿地新規登録

環境省は3日、国際的に重要な湿地を保全するラムサール条約に広島県の宮島など日本の9カ所が新たに登録されると発表した。

6、13日にルーマニアのブカレストで締約国会議が開催予定で、期間中の7日には登録認定証授与式が開かれ、同省担当者や関係自治体、非政府組織(NGO)の代表が出席する。新規登録は宮島のほか、

◆ラムサール条約に新たに登録された湿地

- ・北海道/大沼
- ・富山県/立山弥陀ヶ原・大日平
- ・茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県/渡良瀬遊水地
- ・福井県/中池見湿地、
- ・愛知県/東海丘陵湧水湿地群
- ・兵庫県/円山川下流域・周辺水田
- ・広島県/宮島、
- ・熊本県/荒磯干潟
- ・沖縄県/与那覇湾



茨城、栃木、群馬、埼玉の4県にまたがる渡良瀬遊水地や、円山川下流域・周辺

茨城、栃木、群馬、埼玉の4県にまたがる渡良瀬遊水地
|| 6月

◆(予告)第111回 自然観察&クリーン

「ラムサール条約と干潟の鳥」

主催：小網代の森と干潟を守る会
共催：NPO 法人小網代野外活動調整会議
9月29日(土)
AM10時 三崎口駅前集合
小雨実施

持ち物

長靴、お弁当、飲み物、雨具、(あれば) 双眼鏡、小さなお子さまは着替えもあると安心です。

講師

須藤伸三氏 別府史朗氏



ラムサール条約に新たに登録された湿地

水田(兵庫県)など。環境省によると、今回の登録で日本の登録湿地は計46カ所、合計面積は13万7968畝となった。

渡良瀬遊水地は渡り鳥の渡来地で、ヨシが自生している。台風や大雨時の治水機能も担っており、環境保全との両立が注目されそう

だ。世界遺産の厳島神社がある宮島は国内で唯一のミヤマトンボ生息地。円山川下流域・周辺水田には、絶滅危惧種のコウノトリなどが生息している。

小網代の森と干潟を守る会の活動

- 5/19 つうしん No.123 印刷 横須賀市民活動サポートセンター
- 5/19 スタッフ会議
- 5/31 つうしん No.123 発送
- 6/23 第 109 回自然観察&クリーン
- 6/23 スタッフ会議 三浦市総合福祉センター

第 23 回小網代の森と干潟を守る会総会のお知らせ

日 時 2012 年 8 月 26 日(日) 13 時 30 分～15 時 30 分

場 所 三浦市南下浦市民センター (京急・三浦海岸駅下車 徒歩 1 分)

第 1 部 総会

第 2 部 記念講演「小網代の湾奥の干潟について」

岸 由二氏(NPO法人小網代野外活動調整会議代表理事)

ラムサール条約指定湿地を目指す小網代の干潟を中心にお話を頂きます。

是非、ご参加下さいますよう。なお、ご都合がつかない場合は、同封の委任状の送付を
8 月 25 日までに お願いいたします。

ご寄付ありがとうございます

大泉繁子様、西川次代様、矢部和弘様、三井ヒデ子様、岡見義昭様、飯田久仁子様、
塩入一弥様、但木美穂様、松林伸子様、盛野成信様・雅子様、嶋津誠様、祖父川精治様、
加藤清子様、石原正宣様、福田みどり様、高橋宏之様、岸 修様、上田尚美様、柿本湛子様、
奥津信子様、安西章次様、金木公子様、山城謙一様、久水健史様、大川 須美様、小柳康蔵様、
藤崎英輔様、杉崎泰章様、野本哲夫様、高間玖爾美様・玲江様、大塚 敏様、田中幹人様、
須田漢一様、柴内朱美様、坪田弥乃子様、小田島一生様、大高義彦様、藤野秀代様、辻 晴一様
藤崎洋子様、北村和子様、福井すみ代様、須藤伸三様、加藤利彦様、橋 美千代様、橋ちひろ様

森の応援金・会の賛助会員 ありがとうございます。

小網代の森と干潟を守る会ホームページ

小網代の森と干潟を守る会のホームページでは、「小網代 森と干潟つうしん」をカラー版でご覧いただけるほか、会員さまの専用ページで特別なサービスをご提供しています(会員専用ページのご利用は、下記問い合わせ先へお名前とご住所を明記して、ユーザーID・パスワードをご請求ください)。

インターネットをご利用の方はぜひお申込みください: URL: <http://www.koajiro-higata.com>

お問い合わせ: kohou@koajiro-higata.com (小網代の森と干潟を守る会 広報担当・はし)

※ 会員専用ページの利用はいつでも申し込むことができます、また紙版つうしん郵送の中止・復活はいつでも可能です。上記アドレスへご連絡ください。

NPO 法人小網代野外活動調整会議からのお知らせとお願い

※ 小網代の森と干潟を守る会は NPO 法人小網代野外活動調整会議の活動を支援しています。

トラスト緑地保全支援会員 & 小網代応援団募集

◆トラスト緑地保全支援会員になるには

トラスト財団のパンフレットにある申込書に記入して郵送します。またはトラスト財団のホームページ (<http://ktm.or.jp>) から、申し込むことができます。支援したい緑地にはぜひ「小網代の森」をお選びください。

通常のトラスト会費(大人 2000 円、中高生 1000 円、小学生 500 円、家族会員 3000 円)の他に 3000 円の支援会員会費が必要です。

よろしくお願ひします。

◆小網代応援団に入るには

NPO 法人小網代野外活動調整会議 (電話 : 045-540-8320 E-mail: koajiro@koajiro.org) までお問い合わせください。

「小網代応援団」に登録していただいた方には、年に数回の特別観察会をご案内いたします。森と干潟の様子をしっかりと見守り、楽しみながら、大好きな森を育てていきましょう。

カニパトロールのお知らせ

- 2012 年度カニパトロールは以下の日程で行います。

I 期 : 7 月 22 日 (日)

II 期 : 8 月 4 日 (土) 5 日 (日)

III 期 : 8 月 18 日 (土) 19 日 (日)

IV 期 : 8 月 31 日 (金) 9 月 1 日 (土)

17 時~20 時、小網代湾奥・アカテガニ広場で実施します。



- カニパトに参加されるにあたって、ご注意いただきたいこと

- 実施要領、注意事項、装備については必ず事前に NPO 法人小網代野外活動調整会議ホームページの情報をご確認ください。
- 当日荒天 (雨・強風・波浪・雷等) により、観察中止になることがあります。(中止決定次第、ホームページ <http://www.koajiro.org/> に掲載されます。)
- 森の中にトイレはありませんので、事前に森の外でお済ませください。(三崎口駅構内トイレ、シーボニア前公衆トイレが拝借できます。)
- 1 時間ほど水の中に立って放仔観察をしますので、水に入れる装備 (長靴が最適、サンダル危険)、懐中電灯ご持参ください。

お問い合わせは

NPO 小網代野外活動調整会議事務局へ

TEL: 045-540-8320

URL: <http://www.koajiro.org/>

- ◇ 小網代の森と干潟を守る会は、8 月 4 日のカニパトロールに参加します。会からののお知らせは次ページ

第 110 回自然観察 & クリーンのお知らせ

主催：小網代の森と干潟を守る会 共催：NPO 法人小網代野外活動調整会議

◆ つながる生命 アカテガニの放仔

真夏の大潮の夜、カニのかあさんたちは海をめざして山をおりてきます。水の中はあんまり好きじゃないし、高い波は恐ろしい、だけどかあさんガニは勇気をふりしぼって海に入り、お腹いっぱい抱えたゾエア幼生を放します。去年も今年も、そしてきっと来年もアカテガニたちはこうして生命をつないでゆくのです。こんな夜には、私たち人間も自然の一部になって、アカテガニのお産を、そうっと見守りましょう。



8月4日(土) 16時 三崎口駅前集合
21時 三崎口駅前解散
(荒天中止の場合、予備日8月18日(土))

持ち物 長靴、お弁当、飲み物、雨具、虫よけスプレーなど防虫グッズ、懐中電灯、着替え

- ① 徒歩コース：駅から干潟まで30分くらいの道のりを、スタッフの案内で富士山や三戸浜の眺望を楽しみながら歩きます(熱中症対策を十分をお願いします)。
- ② バスコース：駅からバスで12分、シーボニア入口から白髭神社を通過して干潟に出ます。
(スタッフが同乗します)
* バス料金は片道260円、ファミリー割引期間中なので、(現金・PASMO・Suica・回数券でお支払いの場合)大人1名につき小学生のお子さん1名が無料になります。

- ※ ①、②どちらのコースも小網代の森と干潟を守る会のスタッフが往復のご案内をいたしますが、干潟ではNPO 法人小網代野外活動調整会議のカニパトロールに参加していただきます。
- ※ 雨にかかわらず、荒天(強風・波浪・雷等)の場合、観察中止になることがあります。
(カニパトを主催するNPO 法人小網代野外活動調整会議の判断に従います。
中止決定次第、ホームページ<http://www.koajiro.org/>に掲載されます。)
- ※ ご参加にあたっては前ページ・NPO 法人小網代野外活動調整会議のお知らせにある「●カニパトに参加されるにあたって、ご注意いただきたいこと」を必ずお読みくださいますよう、お願いいたします。

小網代 森と干潟つうしん NO.124 2012年7月14日発行

森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ

小網代の森と干潟を守る会

〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5

代表 高橋 伸和 E-mail: info@koajiro-higata.com

電話 046-889-0067(副代表 仲澤)

URL: <http://www.koajiro-higata.com>

年会費: 一般会員¥1000 賛助会員¥5000(7月~6月 入会金不要)

郵便振替 口座 00260-4-21569 加入者名 小網代の森と干潟を守る会